

特定非営利活動法人

レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

2021年
3月1日
No. 125

隔月1回発行

ひきこもり



イラスト 小松 英行



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 居場所「よりどころ」活動報告 家庭で備えるライフプラン
- 3ページ 田中敦理事長が安心して集える場づくりについて語る
KHJ北海道「はまなす」で当事者が経験談
- 4～5ページ
ひきこもりと老いを考える 第4回 北郷恵美子さん ほか
- 6ページ サテライトSANGOの会 in 小樽でピアスタッフが鼎談
- 7ページ 刊行物の紹介
- 8ページ こちら事務局／編集後記

居場所「よりどころ」活動報告
家庭で備えるひきこもりライフプラン

2月8日月曜日に開催された「よりどころ」親の会では8050問題を把握え高齢期を迎える親子のライフプランについて、家族ピアスタッフとして活動する全国ひきこもりKHIJ家族会連合会北海道「はまなす」会長の北郷恵美子氏と小樽市で二十年以上にわたるひきこもり家族会を運営してきた鈴木祐子氏が話題提供した(写真1)。

家族ピアスタッフの北郷氏は中学1年からひきこもる次男との二人暮らしをはじめ10年を迎える。働いていない息子を抱え生計を立てることの困難さが述べられた。北郷氏は年金収入のほかパートで収入を得て1か月の生活費に充てているが、高齢になるにつれ冠婚葬祭に関する支出も増え、家計に響くため長期展望としてのライフプランは立てられないのが現状だ。普段から節約に心がけているため、日常の生活は何とか成り立っている。「私が長生きすることが息子にとって最善のサポートだと思う」と述べた北郷氏にとって親亡き後の心配は尽きない。「自分が亡くなれば一切の収入が途絶えたるため、そのとき息子が働きたすことに期待をもちながらも無理な場合は支援団体の協力を得て生活保護を受けられるようにしていきたい」と切実な思いを語った(関連記事4〜5ページ参照)。

家族ピアスタッフの鈴木氏は小学6年から始まった不登校が原因でその後二十年以上ひきこもり続ける長男と定年退職した夫と三人で暮らしている。普段の生活では息子が自由に生活できるよう子どもが望まないことは一切しない。息子は二匹の犬の世話をしてくれるため家族としての仕事を担っている。頼んだことを快く引き受けてくれるなど良好な親子関係が築かれている。その背景には本人の意志を尊重した生活を続けたことが大きい。

新型コロナウイルス禍でひきこもりを抱える家族へのアドバイスとして鈴木氏は「家庭内に子どもと一緒にいることに集中することで、親が黙っていても空気が淀み、煮詰まって子どもに伝わるため、親御さんは趣味などをもち毎日楽しいと思えるような生活をしてほしい。そして今の世の中、戦争さえなければなんとかなるぐらいのいい加減な気持ちで過ごしてはどうか」と提言。続けて「子どもが働いていなくてもどんな形でも生きていてほしい。最大の目標はそれだけ」ときっぱりとした口調でわが子への思いを述べた。

田中敦理事長は「節約志向の強い当事者が多いなか、在宅ワークの可能性やひきこもり経験を活かした仕事の構築、親亡き後も安心できる環境整備など検討していきたい」と述べ、さらに「親自身にも人生がある。四六時中子どものことを考えないで気分転換してほしい」と総括した。

 ご寄付ありがとうございます

野村俊幸(カナリア基金)様 2万円
工藤 清 様 2万円

当事者団体活動を円滑にすすめていくために活用していきます。



(写真-1) 右から鈴木祐子氏、北郷恵美子氏、田中敦理事長

キャンパス帯広く田中敦理事長が
安心して集える場づくりについて語る

非営利組織として がん・病気の経験を活かす活動を展開する「CANnet」で2月23日火曜日「引きこもりってなあに?」人と人との距離感を考える」をテーマにZoomを活用したオンラインによる交流会が開催された。

オープニングのグループワークでは、アイズブレイクで「あなたがホッとするとき」について話し、キートークでは、当NPOの田中敦理事長が実際のひきこもり支援について、行政と専門家や支援者と当事者がどのように関わっているか、就労支援よりも、まずは安心して集まれる場所が必要であること、ひきこもりの高齢化「8050問題」と括られることが当事者をどれ程傷つけているか、返信不要の絵手紙で長くつながり続けることなどについて話した。

交流会には20名の参加者があり、実際にひきこもり支援を行なっている方をはじめ支援者が抱える悩みなど、さまざまな質問が出されていた。社会で傷つけられ、うまくコミュニケーションをとれず、結果としてひきこもりの状態になってしまう人のことを、一括りに「ひきこもり」と呼ぶことが良いことなのかなどの意見も出されていた。(CANnetの公式ブログより一部改変して文章を作成しています)

KHJ北海道「はまなす」ピア
スタッフが経験談を語る

1月23日土曜日、KHJ北海道「はまなす」1月例会が札幌市社会福祉総合センター会議室で開催。市内から16名が参加した。例会では当NPOでピアスタッフとして活動するとり氏と尾澤基氏による体験談発表が行われた(写真1)。

最初に登壇した尾澤氏は中学1年から不登校になりその後16年にわたりひきこもった。ひきこもり期間中は母親が仕事で不在のときが多く、互いにストレスも多かったが物理的な衝突はなかった。

28歳のときにひきこもり地域支援センターに相談し、居場所「よりどころ」を紹介され参加するようになり少しずつ人の輪に入ることと自信をつけた。また新聞配達のアルバイトができるまでになった。

尾澤氏はひきこもりが長くなるにつれて自己肯定感が低くなる悪循環に陥らないためにひきこもり期間を有効に使い、その経験を活かすため、ひきこもりピア・サポート活動に興味を持ち、現在は当NPOのスタッフとして活動している。現在ひきこもりで悩んでいる親御さんと対話することで「自分の親も大変だった」「親の立場も理解できるようになった」と活動による気持ちの変化を述べた。続いて登壇したとり氏は現在50代で約20年に及びひきこもり期間がある。かつて10

年間正社員として東京で技術者として働いていたが、休日にまで呼び出されノルマを達成しなければ残業もいとわれない体質に馴染めず離職。技術職の資格をもち、やる気はあるが職場が求める実務経験が乏しいため適職に就くことが困難となり、リーマンショックの到来で「自分は全く評価されないのではないのか」と落ち込み札幌へ戻った。

家族の勧めで居場所「よりどころ」に参加するようになり、それまで自己否定されていた環境が一変し、自分と同じ立場の人たちと交流する良さを知った。とり氏は今一番困っていることを尋ねられたとき「仕事をするのではなくて、仕事を探すこと自体がハードルだ」と答える。応募先を探し履歴書を書いて面接へ行くプロセスに困難を感じる当事者が居場所にも多くいると指摘。「何でもよいから働け」という圧力から前へ進めない当事者の痛みを訴えた。

現在ピアスタッフとして活動するとり氏は「居場所に参加して変化を求める人もいれば、ひきこもり続けたいと願う人もいる。そのどちらにも応援したい」と抱負を述べた。



(写真-2) とり氏、尾澤氏の経験談を聞く参加者

シリーズ ひきこもりと老いを考える（第4回） 北郷恵美子さん～8050 問題解決には行政の支援が必要～

40～50代のひきこもり当事者と高齢の70～80代の親が同居し続ける「ひきこもり8050問題」は、ひきこもりの長期高齢化の象徴的な課題となっています。本稿では8050問題の渦中にある当事者がもつ課題や親亡き後の生き方を考えていきます。第4回は全国ひきこもりKHJ家族会連合会北海道「はまなす」会長の北郷恵美子さん（75）にお話を伺いました。北郷さんは中学1年から不登校となり、その後ひきこもり続ける次男と二人で生活しています。2013年10月から同家族会連合会の会長を務め月2回の例会を開催するほか、当NPO主催の居場所「よりどころ」では家族ピアスタッフとして活動しています。

Q：現在のご家族の生活パターンは？

A：私たち親子の生活はそれぞれのペースで自由にしているというのが現状です。私は週2日1回4時間のアルバイト、KHJ北海道「はまなす」と「よりどころ」ピアスタッフとしての活動、家庭内の日常的にある衣食住のことや買い物、そして友人や親戚との交流を自分の体力に合わせてしています。息子は朝と夕2回の食事は一緒にするが、後はパソコン（ネットでのゲーム、小説、コミック、情報等）三昧で、疲れたら寝るという自由な生活をしています。ただし、各種ゴミ出しや洗った後の食器等の片づけ、自分の部屋の掃除、除雪等は自主的にしてくれていますし、親の会の連絡調整（田中事務局長から息子のパソコンにメールが届く）も引き受けてくれます。二人でテレビ（情報番組やクイズ番組など）を見ることもあります。

Q：最近の息子さんを見続けて何か感じることはありますか。

A：不登校・ひきこもりから27年、私が出かける以外は24時間365日母子二人の生活が続いてきましたが、当初は生活の全部を母に依頼していましたが、最近は母の体力の衰えが判るようになったのか、家庭の中のことは少しずつしてくれるようになりました。息子は歯が痛くても、熱があっても、アトピー性皮膚炎が悪化しても病院に行くとは絶対に言わず乗り切って生活しています。人間本来持っている自然治癒力を息子の生活の中で見ることができました。リアルな社会と繋がらない生活が今の息子にとって普通のことなのかなと感じているところです。

人それぞれが自分の人生を生きるしかないと言うのが基本的に私自身にあるので、息子との生活の中での私の変化はあまりありませんが、時代の変遷によって人間の生き方も変わるのを感じていますし、本音を言えば老後はもっと気楽にとの思いも……。

Q：現在続けている家族会、「よりどころ」のピアスタッフでの活動で日々感じることはなんですか。

A：親の会に参加する方たちは「我が子のひきこもりを何とかしたい」との思いで来ますが、簡単に解決できる問題ではありません。子どもに変化がないと親の会に参加しなくなる方もいますが、周りの方たちの話を聞き、ひきこもり当事者の気持ちを理解し、家庭での対応を工夫したことで親子の関係が少し良くなった等と聞くと嬉しくなります。

親の人生経験や価値観でひきこもり当事者に対応することをなかなか改める事が出来ずに苦しんでいる方もいますが、親も子もそれぞれの人生があるので、もっと気持ちを楽にして生活することで変化が見えてくることもあると思います。

Q：新型コロナ禍で自粛生活が続きましたがそれまでの生活と変化したところはありますか。

新型コロナ禍の中での息子の生活はまったく変化はありませんが、私はアルバイト先の保育園や友人等に迷惑をかけないように、そして親の会の活動に支障が出ないようにとかなり気を遣ったので、日常生活事態は変わることがなくても、ストレスを溜めこみ体調が良くない日が多くありました。ストレス解消のために友人たちと出かけるのを制限していたことも含めて。

Q：8050問題は今後の課題になりますが、親や本人が年齢を重ねることについてどのように感じますか。

A：年齢を重ねると言うことは、親は老化による体力の減退、身体の不具合、さまざまな病気の発症、そして認知症あるいは寝たきりになることも考えられます。当事者本人は社会との隔たりが深くなり、履歴の空白が増え

自分が働ける場所はないと強く感じてしまう状況に陥り、親子共々ひきこもり孤立を一層深めてしまうのではと感じています。「8050問題」は個々では乗り越えられない問題もあるので、高齢家族が孤立しないように行政のさまざまな支援（経済的支援、見守り体制等）が必要と思っています。家庭内でできることは、バランスの良い食事を心がけ免疫力をつけて、適度な運動で体力の低下を防ぐようにして、親は元気で長生きをしてひきこもり当事者をサポートすることと、親の会や支援団体との繋がりを密にして、何かあったら対応してもらう体制をつくっておくことかなと思っています。

Q：今後の家族会のあり方、ひきこもり支援のあり方、社会や政治に対する要望など自由にお答えください。

A：家族会での交流、情報交換、学習はある程度できていると思いますので、会員同士の

支え合いの活動ができればと考えています。ひきこもり支援については、ひきこもり当事者個々のニーズに沿った支援ができればと考えていますが、難しいですね。ひきこもっている我が子が就労して自立してほしいと言う親たちの気持ちも判りますが、ひきこもり当事者も就労して自立したいと言う気持ちがありながら現実としてできないと言うのも理解できますので、ひきこもり当事者が自然体で生きられる社会環境ができればと思っています。障害年金のようにひきこもり者年金があれば、それで生活を支えながら、ひきこもり当事者が自分でできることで社会に参加していく体制ができればと考えています。

新型コロナ禍の中で格差社会が広がっているとの報道があります。国は国民の生活を守る責任がありますので、経済的弱者を救うような施策を創り実行してほしいと願っています。

サテライト事業の助成報告が公開

当NPOが2019年度に実施した「札幌圏ひきこもり地域拠点型居場所移行支援開発事業」の成果報告が同事業に対して助成金を交付した公益財団法人日本社会福祉弘済会のホームページで公開された。

報告では2019年度に小樽市、江別市、苫小牧市で開催されたサテライト事業の詳細とその成果などが述べられ、「集団支援としての居場所のなかで個別支援や家族支援を行うことやピア・サポートを通じた受容や承認を交わすなかで自信と意欲がつくられ新たな仕事づくりにつながる」といった主旨が述べられている。

https://www.nisshasai.jp/fukusijyoseijigyo/download/s2019/n38_letter-post.pdf

札幌圏ひきこもり地域拠点型居場所移行支援開発事業

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク
〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3番2号

助成事業の概要

本研究事業は政府指定都市である札幌市に拠点を置くだけでは当事者ニーズを満たすことができない北海道の広域な地域特性が抱える居場所移行（アクセス）への課題や厚労省ひきこもりの評価・支援に関するガイドラインが示すひきこもり支援の種別（A. 家族支援から当事者本人支援への移行、B. 当事者本人支援から集団支援への移行、C. 集団支援から社会参加支援への移行）の課題解決に向けた具体的な対策を明らかにすることを目的に実施した。2019年4月に当NPO内に事業推進委員会を立ち上げ、同年5月から6月にかけて居場所づくりに意欲がある人口10万人規模の北海道札幌圏エリアの中核都市3地域（O市・T市・E市）を選定。各現地実行委員会での協議を経て2019年7月から12月にかけては当事者団体中核とした地元支援団体機関との連携協働による選定3地域における試行モデル事業を展開し、居場所づくりに必要な相互促進要因である①「場づくり」、②「人づくり」、③「方法づくり」の観点からピアスタッフとプロスタッフの協働実践が繰り返す新たな実践的な知識を蓄えることを目指した。2020年1月から2月にかけては試行モデル事業の結果を受け、各現地実行委員会での意見等を踏まえ事業推進委員会にて最終的な考察を行った。

事業の成果

本研究事業の成果については当事者・実践者双方

の立場から客観的な測定を行うため選定3地域で回収した質問紙アンケート調査データを基に統計分析ソフト・ウェアにて解析処理し、各現地の単純集計に加えクロス集計を実施した。また自由記述（FA）で得られた逐語録はテキストマイニング法（TM）による質的調査研究を取り入れ文章データからの重要語句の抽出とその関連性を概念図にて可視化（Concept Mapper）する解析処理を行った。その結果、「とてもよかった」、「よかった」の回答者が全地域で80%を超す。O市89.8%、T市87.8%、E市84.7%となる高い評価率を示した。自由記述回答（FA）分析による主なる理由としては、普段似たりよなひきこもり経験を有する仲間との出会いや有意義な交流機会が少ない当事者経験者では、お互い自らのひきこもり体験や日常を語り合うことで純粋に楽しいと思える関係性を取り戻すことができたこと。そしてわが子とよく会話できない親・家族では他人の当事者経験者との対話交流を通して得られた様々な情報が本人とどのお互いにかかわればよいかを知る貴重な機会となっていたこと。また日々の実践現場でひきこもり当事者と直接その思いを聞くチャンスが少ない支援者にとっては当事者経験者やその家族から語られるナラティブな生の声に学ぶところが大きかったこと。さらにその他一般市民からは従来想像では知らなかったひきこもりの正しい理解をそれぞれの居住地域に持ち帰る重要なきっかけとなったことが挙げられ、各地域の居場所拠点を通じて適切な支援につながったケースもあった。

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

サテライトSANGOの会 in小樽でピアスタッフが 鼎談 ― 居場所のあり方、人間関係について語る

1月20日水曜日、サテライトSANGOの会 inおたる⑤を開催し、毎回ピアスタッフとして参加してきた尾澤基氏、とり氏、吉田英司氏ら3人に鼎談形式で感想を答えてもらった。三者は当NPO主催の居場所「よりどころ」へ当事者として参加後、ピアスタッフとして江別、苫小牧で開催されたサテライト事業でも話題提供者として発言し活動している。

地方の開催で単発ではなく連続して例会に参加した感想は？

尾澤：これまで江別、苫小牧へ参加したが小樽はどちらかといえば当事者・親が多いように感じる。人が多いところは好きではないので大変やりやすかった。10年振りにJRに乗車して小樽の海もみて新鮮な気持ちになった。こういった機会でないと話せない人もいたのでとても勉強になった。

とり：前年度に参加した際に会った人と再会できました。このサテライトSANGOの会は少人数だけれども継続参加者が多いということは居場所として地域から求められていると思う。尾澤さんが言うように地方に出かける楽しさもある。

吉田：この半年間ピアスタッフとして初めて活動するなか、大学院で学んだ集団精神療法で精神科医・ヤロムが提唱した集団的治療の11の要因を思い出した。誰かの役に立つ「愛他性」誰にも言えない心の奥底を吐露することで気持ちが楽に

なる「カタルシス」周囲から受け入れられる「受容」悩んでいるのは自分だけではなく他の人も悩んでいる「普遍性」など。これら教科書的に学んでいた知識を実際にこういう場で活動することによって活きた形で自分自身の経験になった。自分以外の人と関わることによって脳の活性化になり思いもしない発見が得られた。自分自身が成長する糧になったと思う。

ひきこもり経験者からみて家族や他者との距離をどうとっていいか？

尾澤：自分が安心できる環境で安心できる人と無理なくコミュニケーションをとることが大事。人の多いところよりは少ないところで交流したい。

吉田：かつて自分自身が頑固な面もありながらも周囲に合わせようとしていたため葛藤もあったが、そういう他とは違う自分を受け入れてきた。そういう経験をするなかでここまでだったら受け入れられる、これ以上付き合おうと自分の人格を損なうといった他者に対する基準がそれぞれの範囲で対応している。

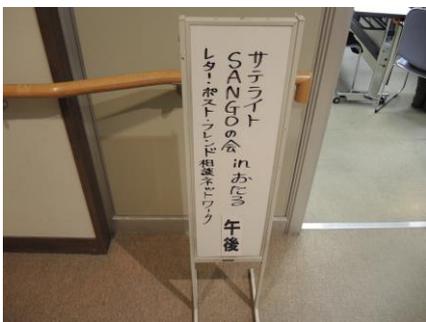
とり：普段からピアだからといった意識はしないように自然体で人と接するように心がけてきた。ただ例会で話することが得意でない人がいたりすると、主体的な役割を果たす必要もあるのかと思う。また参加者の話を聞いたら「そうですね」とかリアクションをするように心がけている。

居場所事業をどのように展開させればよいか？

とり：私が最初に「よりどころ」に参加して感じたのは、説教されずに何を喋ってもいい、喋りたくない人は一人でいてもよいといった一切の強制がなかったこと。それが居場所なのだと思い続けて気づいた。

吉田：全国のひきこもり者数は人口比でみると100人に一人いる割合になる。この人たちが中心となるひきこもりに関する活動は資本主義社会に対抗した位置にあると思う。この100万人が動いても直ぐには社会は変わらないが少数派ではあっても草の根運動的に続けていけば、いずれ私たちにとって住みやすい社会になるように感じる。

尾澤：ひきこもり支援で感じているのは現状を否定され自己肯定できない状態で支援を受けるとなお自己否定感が強まる。脱するとか外へ出ることはなく、ひきこもりながらも気持ちが楽になり快適に過ごせるようにして負担感が少ない形で社会と関わる方向性がよいと思う。



(写真-1) サテライトSANGOの会 inおたる 会場入り口

サテライトSANGOの会 in小樽は2020年度のすべての会期を終了しました。皆様のご支援ご協力を賜りありがとうございました。

刊 行 物 の 紹 介

北方ジャーナル～居場所事業の可能性と課題を語り合う上から目線の支援ではなく『寄り添い共感し合う』場に

月刊情報誌「北方ジャーナル」2021年2月号、連載中のルポ「ひきこもり」65では東京で技術職として働いた経験をもつ男性がリーマンショックを堺に離職し自信喪失。実家へ戻るが家族との軋轢から居心地が良くない日々を送るが自助会へ参加し少しずつ回復していく経緯を掲載。

3月号のルポ「ひきこもり」66では、当NPOが主催する「サテライトSANGOの会 in おたる」でひきこもり経験を持つピアスタッフ3人が小樽の居場所事業を振り返り、今後の展望について意見を交わした模様を掲載。「既存のひきこもり支援には違和感を覚える。ひきこもりながらも社会とつながり快適に過ごせる方法があってもいい」。当事者の目線ならではの率直な声から居場所事業への期待感がうかがえた。ジャーナリストの武智敦子氏が取材執筆する。

(有) Re Studio 発行 A4版 定価 800円+税



北方ジャーナル 2021年2月号
ルポ「ひきこもり」の見出し

『ひきこもりソーシャルワーク～生きる場と関係の創出』 3月22日発刊



8050問題をはじめ多様化するひきこもりをめぐる課題を、わたしたちはどのように受けとめ、どのような支援を構想することができるのか。安心してひきこもりつつ育ち合える場と関係、制度と社会をつくるために、当事者、家族、ソーシャルワーカーがともに取り組む実践の全体像。

著者は佛教大学社会福祉学部教授山本耕平氏。精神保健福祉論、社会福祉論、若者支援論を専門分野とする山本氏は、当NPO主催の「ひきこもりピアサポーター養成研修会」（2013年9月開催）「手紙を活用したピア・アウトリーチ開発実務者予定者研修会」（2018年9月開催）で講師を務めた。

かがわ出版 B5版・並製・152頁 定価 2,200円+税

『さっぽろ 子ども・若者白書 2020』 3月下旬刊行予定

前回の発刊以来5年振りの白書では子どもの権利、家族・家庭を巡る課題、子ども・若者の貧困と格差などが掲載される。当NPOの田中敦理事長は「若者の貧困と7040（8050）問題」について執筆した。

さっぽろ 子ども・若者白書をつくる会・編 定価 1,500円

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000円	入会金 1,000円	一口 1,000円～
年会費 3,000円	年会費 2,000円	

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みをお願いします。

- 口座記号番号 02700-4-66261
- 加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク



◆居場所「よりどころ」、「SANGOの会」参加に伴う留意事項について

新型コロナウイルス感染防止策として当NPOでは、居場所「よりどころ」当事者会・親の会、また当事者会SANGOの会に安全に参加していただくため、出席にあたっては、マスクを着用のうえ、咳エチケットの徹底、手洗い又は消毒を行うなどの留意事項を遵守していただくことをお願いする次第です。たいへん厳しい状況のなかでの再開ですが、よろしく申し上げます。留意事項については団体ホームページをご覧ください。<http://letter-post.com/>

◆「SANGOの会」例会のご案内

2021年3月~4月は下記日程にて行います。新型コロナウイルス感染拡大による体調不安者に考慮してオンライン例会も併行して実施します。概ね35歳を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。オンライン例会に参加ご希望の方は当NPOホームページから事前申し込みが必要です。詳細は事務局までご連絡ください。

《通常例会》※ 感染防止の観点から当面夜間開催は自粛します

とき：4月14日(水) 午後2時00分から4時00分まで

会場：札幌市社会福祉総合センター4階 札幌市ボランティア活動センター 研修室B
(札幌市中央区大通西19丁目1-1 地下鉄東西線西18丁目駅下車徒歩3分)

《オンライン初心者(たとえば体調不安がある人、初参加の人)例会》

とき：3月31日(水) 午後5時30分から7時30分まで

開催のご案内は随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。

◆居場所「よりどころ」開催のご案内(3月)

(当事者会) 3月1日(月)※ 3月15日(月)※ 10階1050会議室
(感染防止の観点から当初の貸室を変更)

(親の会) 3月8日(月)※ 3月22日(月)※ 10階1010会議室

開催会場：北海道立道民活動センター「かでる2.7」

(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間：いずれも午後1時30分から午後3時00分まで(短縮開催)

利用対象：ひきこもり当事者及びその家族

参加費：無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。

※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です。

◆自民党政務調査会「ひきこもり」の社会参画を考えるプロジェクトチームヒアリング

自由民主党政務調査会(下村博文 会長)プロジェクトチーム・いわゆる「ひきこもり」の社会参加を考えるPT(馳 浩 座長)主催による会議に当NPOの田中敦理事長が出席し、下記の議題に対する所見を述べ、出席議員と意見交換を行います。当日は緊急事態宣言下のためリモートによる出席となります。

開催日時：3月10日(水) 午後5時00分~午後6時00分

開催場所：自由民主党本部1階101号室

議題：民間支援団体からのヒアリング

出席団体：社会保険労務士法人 日本障害年金研究所 千葉障害年金相談センター
NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

☆ 編集後記 ☆

新型コロナウイルス感染が発症してから1年が経過しました。気を遣う生活で体調不良に陥ることは少なくなく、筆者も健康診断で精密検査となったり親は入院中です。健康を意識する1年となります。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください